

と記してゐる。しかしマルコ・ポロの謂ふ *Gerfalcon* を附した牌といふのは、正に元代の史料にいふ海青牌に相違なく、ユールのいふやうにポロのみがこれを記し、他にこれに關説するものがないではない。

更にまた一九二八年前記バツヂ氏の譯出した *The Monks of Kublâi khân* p. 20 には、伊兒汗 *Kaikhâto* (アルゲン汗の子) が、忽必烈の遣はした *Mâr Yahbh-Allâhâ* に「金の牌、即ち *Sunkôr* と呼ばれる牌……を與へた」と記してある。こゝにいふ *Sunkôr* とは、前に述べたる蒙古語の *Shongkar* 即ち海青で、蒙古の海青牌の制度は遠く西方の伊兒汗國にも及び、宗室治下の地に於けると同じく *Gerfalcon* 牌が用ゐられたものであることを明らかに知り得られる。それだからマルコ・ポロの記してゐるこの牌の記事は、決して虚誕に非ることはないことであるが、然も如何なる状態に於て海青の形が牌上に附けられてあつたかについては、依然として知ることが得なかつたのである。

大正十四年中華民國北京に留學中の鴛淵一氏から、余はこゝに掲げた牌札拓本の寫眞^(口繪第五)を郵寄せられたが、當時特にこれに留意することなしに過した。然るに頃日再び元代の驛傳に關する研究を試みるに當つてこれを想起し、新たにこれについて考察を加へた結果、これが所謂海青牌の拓本に外ならぬであらうことを知るに至つた。鴛淵氏の言ふところに據ると、原牌は或る蒙古人が外人に賣却する爲に上海に齎し去り、直接見ることが得なかつたけれども、その地質は銅であるらしく、寫眞^{||}左右直徑三寸〇五厘、上下三寸八分^{||}は拓本について略々實物大に撮影したものであることを聞いた外、發見の場所・状態等一切知ることが得ないといふのである。寫眞に就いて認め得られるやうに、この牌子は圓形であつて、頂點に圓環を附け、牌の表面^(A同圖)には三重に輪廓を附けて方形を劃